

H25. 5. 25

## 異食、弄便への対応

Dr.



「認知症ケア」シリーズ⑩

有吉佐和子さんの小説「恍惚の人」が発表されたのが1972(昭和47)年。翌年には、森繁久彌さん主演で映画化もされています。当時はまだ「痴呆」という言葉しかありませんでしたが、わが国において認知症を描いた衝撃的な作品でした。当時、中学生でしたが、便を弄ぶシーンの記憶は鮮明に残っています。小説発表から約40年。認知症をめぐる当時の認識と変わった点がいくつもありました。

「異食」とは食べ物でないものを口にする(こと)、「弄便」とは便を弄ぶ(こと)です。「恍惚の人」ではこの2つの印象があまりにも強すぎて「認知症」「人格崩壊」と誤解されてきたように思います。

「異食」とは食べ物でないものを口にする(こと)、「弄便」とは便を弄ぶ(こと)です。「恍惚の人」ではこの2つの印象があまりにも強すぎて「認知症」「人格崩壊」と誤解されてきたように思います。

### 赤ちゃんへの「回帰」ととらえて

当時はこうした行為をできないようにする、すなわち身体

の時代には「退行」という概念でとらえられていました。

供が替えている…。すなわち、60年前と立場が逆転して

にトイレでの排尿には至りません。失敗を重ねながら、母親に手伝わしてもらいつつ少しずつ排尿が自立します。その逆のことが起こっているのだ

「人間からの逸脱」を感じさせるあまりいい言葉ではありませんが、現在、こうした行動は「回帰」としてとらえられています。

しかし親子間で受けた恩を返し合っているのですから、実にはほほ笑ましい光景でもあります。「回帰」という言葉を

逆回しのような状態です。よく分からなければ施設の介護者に相談するといいでしょ。彼らは排泄介助のプロです。

長尾和宏 (ながお・かずひろ)  
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る、合診療を目指す。医学博士。近著「平穩死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。54歳。



拘束や薬物の使用で対応していましたが、認識は根本的に変わりました。異食や弄便は現在、赤ちゃん回帰ととらえられています。赤ちゃんは、目についたものは何でも口に運びます。オムツの中に便が出たら不快なので泣いて訴えます。しかし高齢者の場合は、たまたまそこに手が届くので自分で取り除こうとして便に触るので、手が汚れるので、壁で拭くことになります。異食や弄便は「恍惚の人」

身体拘束 介護保険制度が発足した平成12年から高齢者施設などにおける身体拘束は禁止されている。人権擁護の視点のみならず、QOL(生活の質)を損ない、寝たきりに至るため、国を挙げて「身体拘束ゼロ作戦」が推進されている。

ひようついで

いずれにせよ、安易なオムツ当てで、認知症の人に屈辱感を与えてはいけません。常にその人のプライドや尊厳を